

岐阜薬科大と神戸大などの研究グループは14日、脳内にある遺伝子・シアンルグリセロールキナーゼβ(DGKβ)が記憶や認知機能に深く関連していることが新たに分かったと発表した。正常なマウスとDGKβが欠けたマウスとでは記憶力に明確な差が出たという。15日付の米科学誌「PLOS ONE」電子版に

岐阜薬科大と神戸大

掲載される。

DGKβは、学習や記憶にかかわる脳の「海馬」と呼ばれる部分に多く存在する。細胞内で情報伝達など

βを持たないマウスを作ることに成功し、正常なマウスと行動を比較した。透明の台を水面の少し下になるようにプールに入れる。岐阜薬科大の原英彰教授(薬効解析学専攻)は「この遺伝子の働きを深く調べることで、精神疾患の仕組みの解明や、将来的にはアルツハイマー病などの新薬開発の手がかりになる」と話している。【立松勝】

記憶関与の遺伝子発見

をする別の遺伝子の働きを調節する機能があることは知られていた。

研究グループは、DGK

βを欠けたマウスと正常なマウスを比べると、正常なマウスがすぐ台の位置を覚えて上に乗ったのに対し、DGKβのないマウスの約4割は台

の位置が分からず戸惑っていた。神経細胞の形状の発達にも変化がみられたという。